

## 目次

第 18 回大会関連	P1	調査ノート(1)	P14
第 27 回総会報告	P8	調査ノート(2)	P19
理事会報告	P10	中国定点観察記	P20
『日中社会学研究』第 15 号		日中社会学会のあゆみ(2)	P22
原稿募集のお知らせ	P11	中日社会学会と日中社会学会の 今後の交流について	P24
研究集会のお知らせ	P12	事務局からのお知らせ	P26

## 第 18 回大会関連

### 日中社会学会第 18 回大会を終えて

唐 燕霞

(第 18 回大会実行委員長・島根県立大学)

2006 年 6 月 3 日(土)、4 日(日)の 2 日間にわたって、日中社会学会第 18 回大会が島根県立大学で開催され、約 50 人が参加しました。

第 1 日目は特別講演と二つの分科会、第 2 日目は一般自由報告、書評セッションとミニシンポジウムが行われました。二つの分科会と一般自由報告ではそれぞれ 10 本の報告があり、地方開催にしては盛りだくさんのプログラムであり、中国の政治、経済、社会、文化に関する最新の動向の研究報告がなされており、とりわけ若手研究者の活躍が印象的でした。但し、一つの会場に報告者数が 5 名いるので、フロア一との質疑応答の時間が十分取れなかったことはやや残念でした。

今回の大会の開催にあたって、島根県立大学の多数の教職員や学生のご協力をいただきました。ボランティアとして働いてくださった教員や助手の皆さんには、心より感謝しております。さらに、特筆すべきなのは、今回の大会の開催に際し、地元浜田市の市長をはじめとする市役所の皆様のご支援をいただいたことです。浜田市の助成金のお陰で、今回は初日の懇親会場で浜田市の伝統芸能である石見神楽を上

演することができました。これは日中社会学会にとって初めての試みであり、会員の皆様から大反響を得られました。この紙面を借りて浜田市の関係の方々にも心より感謝の意を表したいと思います。

最後に来年の日本福祉大学(名古屋キャンパス)での大会も、盛会であることを心より願っております。

## 第 1 日：6 月 3 日(土)

### 特別講演

今岡 日出紀氏(島根県立大学副学長)  
「北東アジア研究のための 3 つの視角」

司会：陳 立行(日本福祉大学)

21 世紀はアジアの世紀といわれている。70 年代の NIC s の興起以降、90 年代の中国は急速な経済成長に伴い、東アジアがまた世界の注目が浴びられている。北東アジアに面している島根県立大学は近年北東アジア学の創成に向かって精力的に取り組みをしている。

この特別講演では、今岡日出紀先生はこれまでの経済史上の地域概念を踏まえ、日本、中国、朝鮮半島、モンゴル、シベリアを含む地域

を北東アジアとして定義し、国際経済関係、国家と市場の関係、儒教文化という三つの視点から、一般性の枠組みの中から北東アジアの諸国の共通性と特殊性について語られた。今後学際的に北東アジア学の研究の必要性を提起した。

講演の後、北東アジア諸国と地域における市場に対する国家の役割、官僚体制のあり方、経済発展に対する儒教文化の影響力について建設的議論が行われた。

## 分科会 A

### 「中国からみる東アジア社会の新構想」

- ・ 黒田由彦(名古屋大学)「現代中国の住民組織と自治 基層組織から見る中国社会」
- ・ 中村良二(独立行政法人労働政策研究・研修機構)「中国進出日系企業の現状と課題」
- ・ 李尚波(桜美林大学)「中国企業の人材戦略」
- ・ 長田洋司(早稲田大学大学院)「中国都市部の基層社会 北京市社区を事例として」
- ・ 松木孝文(名古屋大学大学院)「道教にかかわるセーフティネットの位置づけ」

司会：南 裕子(一橋大学)

本セッションの報告者とそのタイトルは、順に、黒田由彦氏(名古屋大学)「現代中国の住民組織と自治」、中村良二氏(労働政策研究・研修機構)「中国進出日系企業の現状と課題」、長田洋司氏(早稲田大学・院)「中国都市の基層組織 - 北京市社区を事例として」、松木孝文氏(名古屋大学・院)「民衆文化が地域社会に対して持つ潜在的影響力 - 福州市民間信仰の事例より」であった。以下、第一報告から順に、報告内容およびフロアとの議論の論点を紹介する。

黒田報告では、まず、都市における住民組織

の変遷が整理され、その上で住民組織の分析枠組みの検討が行われた。2000年以降の制度的変化を踏まえ、黒田氏は「社区 = 近隣政府論」という枠組みが有用であるとの見解を示した。そして、自発的な活動の公認の一方で、地域内の社会的弱者救済と秩序維持は担保されなければならないという中国における住民組織と自治のあり方、そしてその背後に存在する非公式な党の影響力が指摘された。

中村報告は、中国進出日系企業における党の指導と「工会」の機能について問題提起したものである。共産党の指導は日系企業においても強化される方向にあり、党の下部組織として位置づけられる「工会」の設置が求められている。だが今日の「工会」には、従来のような経営側(およびそれを指導する党組織)の視点による問題解決を補助する組織ではなく、職員労働者間の格差が拡大する中、企業内の弱者のための組織として機能することが必要であると指摘された。これは、先の黒田報告とも通底する論点であると言えよう。

長田報告においては、社区建設として行政が目指す方向性を政策文書から分析した後に、北京市における事例から、行政側の意図と実際の現場にはズレがあるという社区建設に対する評価がなされた。さらに、都市における家族形態の変化(高齢化、核家族化)対応した取り組みが、今や現実的必要に迫られており、また今後の発展可能性も高いとされた。なお、この「ズレ」については、それをとらえる枠組みにまだ構築の余地があることがフロアから指摘された。このことは事例の社区に見られたように、党员であると同時に社区の一住民として社区の人間関係形成の基盤となる人々の存在をどのようにとらえるかという問題とかわるものである。そしてこれはまた、黒田報告で指摘のあった「党の非公式な影響力」の一つのあり方と見ることができよう。

松木報告は、資源をもたない一般民衆が現代社会の増大する複雑性にいかに対処するか？という問いの答えを、福建省福州市の民間信仰の事例から見出そうとしたものである。3つの廟の関係者へのヒアリングからは、廟で行われる抽籤が人々の行動に大きな影響を与えていることが明らかになった。松木氏は、この抽籤の基盤となるものとして、廟が地域住民の交流の場として日常的に存在し、廟の幹部と人々の間で情報が交換され、信頼関係が築かれていることを指摘した。なお、フロアからは、人間の決断における宗教のもつ役割、宗教的心性からこの事例を解釈することもできるのではないかという意見が出された。

以上の4つの報告から、本分科会のタイトルである「中国からみる東アジア社会の新構想」を総括討論すべきであったが、司会の不手際により、残念ながらその時間を設けることはできなかった。報告者ならびに当日参加された会員各位にお詫び申し上げる次第である。

## 分科会 B

### 「東アジアの『越境』が秘める可能性」

- ・ 陳捷（愛媛大学）「移動する中国商人 歴史からみるその移動空間」
- ・ 宮崎満（松山大学大学院）「『民工』子弟の教育問題と 86 年義務教育法改正論議」
- ・ 穂山新（筑波大学大学院）「中国における 民族 の起源 孫文はいかにして「民族主義者」になったのか」
- ・ 南誠（京都大学大学院）「『中国帰国者』の歴史 / 社会的形成 国家、エスニシティ、コミュニティ」
- ・ 石井健一（筑波大学）「中国人の対日意識とブランド志向」

司会：永野 武（松山大学）

分科会 B では、5 名からの報告がなされた。

陳捷会員の報告は、商人の移動空間に着目し、近代における山西商人と浙江商人との比較考察から、中国商人の移動性の諸要因を探り、中国経済社会の内在的、外来的な融和と排他性を究明するというものであった。

宮崎満会員の報告は、「『民工』子弟の教育問題と 86 年義務教育法改正論議」とのタイトルどおり、教育問題と法改正論議を、現地での調査報告を交えながらなされた。

穂山新会員の報告は、何が孫文に「民族主義」を語らせたのかという視点からなされた。そして、彼の「民族主義」が、あくまでナショナリズム運動の過程の中で「発見」されたものなのであることなどが主張された。

南誠会員の報告は、中国帰国者をめぐるエスニック境界線の生成維持について考察であった。中国帰国者の概況を踏まえたうえで、具体的な事例をもとに考察がなされていた。

石井健一会員の報告では、社会調査データを踏まえて、中国人の対日意識について、愛国心と民族中心主義が別の変数であることなど、興味深い発見がいくつか紹介された。

以上の報告に対する質疑応答や議論は、理論的枠組みなどの核心に迫るものから、事実確認まで、さまざまな水準にわたった。各々の報告においては、一定程度議論の深まりを見せることができたが、総括的な討論の時間を確保することができず、分科会のテーマに迫ることができなかった。

## 第2日：6月4日（日）

### 一般自由報告A

- ・ 呉偉明（香港中文大学）『『貞子』が『キョンシー』にめぐりあって：日本ホラー映画要素の香港化について』
- ・ 王鳳（立教大学）『改革開放後における中国社会の『文化的目標』をめぐって』
- ・ 于臣（島根県立大学）『日中実業家の『公』の思想 - 洪沢栄一と張謇を例に』
- ・ 坂部晶子（島根県立大学）『植民地経験の聞き取り実践 黒龍江省東寧県を事例として』
- ・ 趙曉紅（島根県立大学大学院）『“満州国”における衛生事業の展開と日本の影響』

司会：文 楚雄（立命館大学）

6月4日（日）午前一般自由報告Aセッションでは、王鳳氏、于臣氏、坂部晶子氏、趙曉紅氏の四人の発表があった。

王鳳氏は『改革開放後における「文化的目標」をめぐって』というテーマで発表した。市場経済のシステムが導入された以降の中国では、「社会主義精神文明建設」という「文化的目標」も提起されている。その内容が少しずつ変化している。発表者は『人民日報』の記事や党大会の文献などを通して「社会主義精神文明建設」の内容およびその変化を考察し、現在の中国の「文化的目標」が非常に複雑な様相を呈していると指摘した。フロアからは、「社会主義精神文明建設」に関する中国政府の考え方と、一般国民の実際の考え方及び中国の伝統とはどのような状態になっているのかなどの質問が出され、熱心な議論が展開された。

于臣氏は『日中両国の実業家から見る「公」の思想 洪沢栄一と張謇を例に』というテ

マで発表した。于臣氏の発表では、ほぼ同時代の日中両国の代表的な実業家である洪沢栄一と張謇の「公」や「公益」に関する考え方や内容を比較し、洪沢の「公」が国家の意義が中心になっているのに対して、張謇の「公」は宗族意識につながる家族、地方団体の共同性を指すものであると指摘した。フロアからは、洪沢と張謇の両者の考え方の違いを、例を挙げて具体的に説明してほしいという質問があり、熱心な説明で洪沢と張謇の「公」の思想に対する認識がたいへん深まった。

坂部晶子氏は『植民地経験の聞き取り実践 黒龍江省東寧県を事例として』というテーマで発表した。坂部晶子氏の発表では、「満州国」当時の地方誌や調査報告書のなかでは、当時の軍事要塞労働者に関する記述がほとんど見られないことに着眼し、黒龍江省東寧県の要塞建設等での労働状況について、「満州国」当時の経験者への聞き取り調査を行い、その聞き取った内容を報告した。植民地経験者の証言では要塞建設労働者の労働状況が過酷であったことがありありと記されている。フロアからは、要塞の状況や聞き取り調査対象者の範囲などについて質問があり、熱心な議論が展開された。

趙曉紅氏は『「満州国」における衛生事業の展開と日本の影響』というテーマで発表した。「満州国」では衛生面において法規を公布したり、国公立病院、診療所、防疫施設等を設置したりした。保健衛生、公衆衛生、さらに学校衛生も重視した。しかし、「満州国」の衛生事業の根底には、やはり日本の植民地政策が密接に関係しており、衛生事業は戦争に奉仕する道具としての役割を果たさなければならなかったことを否定できないと指摘した。フロアからは、「満州国」の衛生状況や病院、診療所の治療状態などについての質問が出され、討論に熱が入った。

## 一般自由報告 B

- ・ 宮内紀靖（中国瀋陽師範学院）「中国社会構造と欧州社会構造」
- ・ 楊平（筑波大学大学院）「中国太湖における住民生活と漁業の変化」
- ・ 辺静（お茶の水女子大学大学院）「中国中年世代の家族キャリアと職業キャリア 北京におけるインタビュー調査からの一考察」
- ・ 包敏（広島国際大学）「中国におけるソーシャルワーク専門教育の現状と課題」
- ・ ライカイ ジョンボル（京都大学大学院）「家族の近代化に関わる収斂理論と分散理論の一考察 日本、中国大陸、台湾における調査研究から」

司会：東 美晴（流通経済大学）

一般自由報告 B では、辺静会員による「中国中年期男性の職業キャリア 北京におけるインタビュー調査からの報告」、宮内紀靖会員による「中国社会構造と欧州社会構造」、楊平会員による「中国太湖の漁民による地域空間の複合利用戦略」、包敏会員による「中国における福祉人材教育」、ライカイ・ジョンボル会員による「家族の近代化に関わる収斂理論と分散理論の一考察 日本、中国大陸、台湾における調査から」の 5 本の報告があり、それぞれ活発に議論が行われた。

辺静会員の「中国中年期男性の職業キャリア 北京におけるインタビュー調査からの報告」は文革による下放・教育分断等の特殊な体験がある中国の中年期の男性の、その後のキャリア形成について、12 人のインタビューケースから分析を行ったものである。全体の傾向として、初職から離職、再就職という単位間の移

動を経験した者が多く、これらの移動の多くが同型職種間の移動であった。

宮内紀靖会員による「中国社会構造と欧州社会構造」は、中国社会と欧州社会を比較する方法を模索するという内容の報告であった。比較項目としては面積（土地利用を含む）、人口（密度・増減等を含む）など、比較可能で、比較の意味があるもの間で行うべきであり、文化・歴史をその項目とするには複雑であるというものであった。

楊平会員による「中国太湖の漁民による地域空間の複合利用戦略」は、太湖の資源・景観保全のための禁漁政策や観光政策などの生活環境の変化に直面した太湖畔の漁民が、漁業を利用した観光業とそこで供給する野菜の生産などによって生活手段を確立していくが、その日常実践が自然に環境保全に貢献するものとなっていた、という報告であった。

包敏会員による「中国における福祉人材教育」は、膨大な資料を整理し、中国におけるソーシャルワーク専門教育の歴史を跡付け、これを踏まえて現状を整理するとともに、中国におけるソーシャルワーク専門教育の内容を明らかにするという内容であった。一つの専門領域に形を与えようとする、非常に意欲的な研究であり、報告であった。

ライカイ・ジョンボル会員による「家族の近代化に関わる収斂理論と分散理論の一考察 日本、中国大陸、台湾における調査から」は、日本、中国、台湾の調査事例の分析を通し、それぞれの事例における家族の近代化の方向が収斂理論（伝統的家族規範は大きく変化し、いずれの社会においても同様な様相となる）、分散理論（伝統的家族規範は変化しても、多様性をもつ）の傾向を持つのかを検討しようとするものであった。いずれの調査も収斂理論（欧米と同様な様相となる）とは異なる特徴が見いだされ、分散理論（修正収斂理論の可能性も含め）

の傾向が見いだされている。東アジアにおける家族の近代化を考える上で、興味深い報告であった。

## 書評セッション

『再訪・沸騰する中国農村』

細谷 昂・佐藤 利明・小林 一穂・吉野 英岐・  
劉文 静（御茶の水書房，2005 年）

報告：小林一穂（東北大学）

書評セッションについて、首藤（ニューズレター編集担当）より報告申し上げたい。

書評セッションでは、小林一穂会員より、ご自身が執筆を担当された部分に限定して報告する旨が述べられ、フロアから寄せられた質問に対しても、編著者を代表する立場としてではなく、あくまでも小林会員の個人的見解として応答がなされた。

本書『再訪・沸騰する中国農村』（以下『再訪』）は、前著『沸騰する中国農村』（御茶の水書房，1997 年）でモノグラフの手法によって詳細な分析がなされた河北省辛集市新壘頭郷新壘頭村の「再訪」の成果である。前回の調査よりすでに 10 年ほどが経過した。『再訪』では、市場経済の急激な浸透のもと、家族生活、行政組織、土地制度と土地利用、農産物販売、民营企业の展開、環境問題などの変化や発展が、ケースの追跡調査を中心にして、明らかにされている。

小林会員は「民营企业と環境問題」（『再訪』第 5 章）の成果に主にに基づき、以下のような内容について報告された。10 年前の「第一次調査」において、調査村はすでに生業基盤の多様化が進み、階層差も顕著であった。現在の状況について、村の工業では、化学薬品を用いた污水处理が問題となって、皮革工場や製紙工場が辛集市の設定した工業団地に移転したり、

また、移転する資金を持たない零細企業では廃業に追い込まれたりするなど、民营企业の浮沈が激しい。一方、ダウンジャケット工場など村の中でも規模の拡大に成功している工場では、経営者と党・政府機関との密接な関係が観察できる。この 10 年間をみると、家族内構造に大きな変化はみられないが、同居/別居、同食、同睡などに関する関係の出入りは激しく、まとめり具合は多様な形をなしている。家族はどのような範囲を指すのかについて、インフォーマントの答えも多様である。村の行政組織は党と村民委員会が一体化している。2003 年の SARS では、こうした運動組織としての党のあり方が顕著に現れ、「公民一体」の対処が功を奏していた。

小林会員の報告を受けた話題提供（南裕子会員、首藤明和）では、兼業化の意義に関してさらに議論が深められた。話題提供者の質問を受けて、小林会員は、兼業化は、商品作物の開発や農業の機械化、農業労働者の雇用を通じた企業化など農業の産業化を推し進めるので、必ずしも農業の粗放化を招くものではないこと、

現在の中国では、農民は制度上、土地に縛られてやむを得ず低収益な生業についているのではなく、山東省の事例（劉文静氏『再訪』第 4 章）にもあるように、むしろ土地集約による大規模化もみられ、合作組織（銀行や保険業への取り組みは遅れているが、販売や購入では成果を結びつつある）の設立など市場経済への主体的な対応も行われている。この点から言っても、土地に縛られている農民ではないこと、などが説明された。

この書評セッションは、首藤にとって、たいへん示唆に富むものであった。本書は、長年にわたって培ってこられた農村研究の理論と方法を駆使している。収集された豊富な資料は、激動の中国農村に対する個別的な知見にとどまらない。むしろ、東アジアの都市農村をめ

ぐる問題、東アジアの「市民社会」生成をどう考えるかなど、個別と普遍を行き交うさまざまな問題も問いかけている。これから農村社会の実証研究に取り組もうとされている若手研究者には、是非、一読を薦めたい。自ら汗を流して資料を収集し、その上で、社会学的な一般理論の検証に努める。この繰り返し、アジアをフィールドとする社会学者の務めであり、人類の発展に対する貢献にもなる。このことを改めて感じた書評セッションであった。

## ミニシンポジウム

### 「混沌と中国社会を語る」

- ・報告1：中村則弘（愛媛大学）  
『『混沌』と中国における社会変動の担い手』
- ・報告2：東美晴（流通経済大学）  
「多元的世界としての中国を考える」
- ・コメンテーター：根橋正一（流通経済大学）

司会：西澤治彦（武蔵大学）

新しい試みとして、今回はミニシンポジウムが開催された。最終プログラムということで人数も「適度」に減少したため、大会場からゼミ室に移動してシンポジウムを行ったが、結果として、普段の研究会のようなアットホームな雰囲気で行進することができた。

問題提起として、最初に中村則弘氏による「混沌を語る」の発表があった。中村氏は中国の「社会矛盾が山積する現在の状況でも、いわば不気味な安定がみられる」という現実を出発点として、従来、否定的にとらえられていた中国社会の「混沌」とした部分を、積極的に受け入れるべきであると主張し、個人の生活指針のレベルを具体例に、混沌のモデルを提示された。（その論旨は愛媛大学国際比較研究会『国際比較研究』2006年 vol.2の同氏の論文を参照）

これを受ける形で、東美晴氏より、「移動する人々 多元的世界として中国を考える」の発表があった。東氏は、「混沌」の一つの側面として、移動をキーワードに、いくつかの具体例を提示された。即ち、クリフォードのマリノフスキー論や鶴見和子の費孝通論などを紹介しながら、移動を記述する視点が欠落しやすいことを指摘し、旅と観光を含む、現代中国における移動の構造モデルを提示された。最後に、根橋正一氏より、ポランニーを援用しつつ、移動により発生する賃金労働者の発生という問題などのコメントがなされた。

質疑応答では、司会者からまず、中国人研究者らに向けて、中村氏の、中国が混沌を内包する社会という「前提」の是非をめぐって議論をお願いした。結果は、基本的には賛同できるが、中国社会には混沌の一方で、絶えず秩序を構築しようとする動きがあるとの指摘がなされた。さらに混沌が存在するのが個人のレベルなのか、社会のレベルなのかといった問題、「関係学」にみられるような中国特有の人間関係と混沌との関係などが議論された。

一方、東氏の発表に対しては、司会者の方から、本来は土地に縛られるはずの中国の「農民」が、なぜかくも高い移動性を示しているのか、という問題を提起し、それにそって「農民」のイメージが中国と日本とでは異なることなどが議論された。

このほかにも、参加者からは積極的な発言が目立ち、時間を30分延長して、討議が続けられた。文字通りのミニシンポジウムではあったが、形式的な議論に終わることなく、ホンネトークが炸裂する熱気に満ちた雰囲気の中で、有意義な時間を過ごすことができたと思っている。

## 第 27 回総会報告

2006 年 6 月 3 日（土）島根県立大学

中村会長からの開会の挨拶に続き、晨光会員が議長に選出され、議事に入りました。

### 第 1 号議案 2005 年度事業報告

以下の各項目について、事務局および各担当理事より報告がなされました。

1. 研究大会の開催 06 年 0 月
2. 機関誌『日中社会学研究』  
第 13 号編集発行
3. 「ニューズレター」発行 3 回 45～47 号  
05 年 11 月 06 年 3 月 06 年 5 月
4. 理事会報告 3 回  
05 年 6 月 12 日 05 年 10 月 22 日  
06 年 6 月 3 日
5. ホームページの運営
6. 会員業績一覧の作成 ホームページで公開
7. 会員概況  
前大会以降 入会 10 名 退会 4 名  
現会員 175 名（一般 100 名，学生 75 名）  
（在外外国人会員は含まず）
8. 編集委員会報告  
『日中社会学研究』第 14 号の編集進捗状況について
9. 研究委員会報告 秋の研究集会  
2 日間 2 部構成で行いました。  
05 年 11 月 26 日，27 日
10. 中日社会学会との交流推進
11. ワーキングペーパー集の編集発行

### 第 2 号議案 2005 年度決算報告

会計担当理事より、以下の資料にもとづき、  
・一般会計報告、  
・第 17 回大会・第 26 回総会特別会計について、報告がなされました  
（備考については略してあります）。

## ・一般会計報告

収入総額	1,638,184
支出総額	921,641
差し引き残額（次年度繰越金）	716,543
残額内訳	
郵便局定期預金	300,000
郵便振替口座	46,880
郵便局普通口座	273,414
現金	96,249

### 収入の部

費目	予算額	決算額	増減額
前年度繰越金	921,641	921,641	0
会費収入	600,000	646,000	46,000
機関誌販売	150,000	10,000	140,000
雑収入	1,000	60,543	59,543
合計	1,672,641	1,638,184	34,457

### 支出の部

費目	予算額	決算額	残額額
機関誌制作費	350,000	680,400	330,400
学会コース経費	20,000	0	20,000
事業費	85,000	70,140	14,860
事務費	70,000	54,941	15,059
通信費	120,000	77,760	42,240
会議費	50,000	0	50,000
大会補助	100,000	38,400	61,600
予備費	877,641	0	877,641
合計	1,672,641	921,641	751,000

## ・第 17 回大会・第 26 回総会特別会計

日時：2005 年 6 月 11 日・12 日

会場：お茶の水女子大学

大会会計担当者：袖井孝子

収入総額	174,000
支出総額	174,000
残額	0



<u>収入の部</u>	
大会参加費	96,000
懇親会費	78,000
計	<u>174,000</u>

<u>支出の部</u>	
会場使用料	22,313
懇親会費	60,000
消耗品費	8,620
アルバイト料	65,000
飲食料費	15,905
雑費	<u>2,162</u>
合計	<u>174,000</u>

上記の通り報告申し上げます

2006年5月18日

日中社会学会事務局

会計担当理事 唐 燕霞 印

### 第3号議案 2005年度会計監査報告

以下の資料を唐会計担当理事が代読し、監査結果について報告がなされました。

決算報告および会計監査報告を受け、2005年度決算が賛成多数で承認されました。

#### 2005年度監査報告

帳簿、預金証書、支出証拠書などを監査した結果、いずれも適正に処理されていたことを報告します。

2006年5月26日

監査 細萱 伸子 印

富田 和広 印

### 第4号議案 2005年度事業計画案

以下の各項目について、事務局および各担当理事より事業計画案の説明がなされました。質疑応答を経て、賛成多数により承認されました。

1. 研究大会の開催
2. 機関誌『日中社会学研究』編集発行 第14号、第15号
3. 『日中社会学会ワーキングペーパー集』編集発行 第2号
4. 「ニューズレター」発行3回
5. 研究会開催 2~3回
6. 理事会開催 2~3回
7. ホームページの運営
8. 会員業績一覧の作成（
9. 中日社会学会との交流
10. 資料集作成
11. 中長期構想の策定

### 第5号議案 2006年度予算案

事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

<u>収入の部</u>	
費目	<u>予算額</u>
前年度繰越金	716,543
会費収入	650,000
機関誌販売	50,000
雑収入	<u>1,000</u>
合計	<u>1,417,543</u>

<u>支出の部</u>	
費目	<u>予算額</u>
機関誌制作費	600,000
ワーキングペーパー集制作費	80,000
学会ニュース経費	20,000
事業費	5,000
事務費	70,000
通信費	100,000

会議費	50,000
大会補助	100,000
予備費	392,543
合計	1,417,543

## 第 6 号議案 日中社会学会会則改正について

以下の改正案について事務局から説明がなされ、質疑応答を経て賛成多数で承認されました。

日中社会学会会則（改正案）

第 6 条 役員の職務は次の通りとする。

2 理事は、会長を補佐し本会の運営に当たる。

理事の互選により、名簿担当理事・会計担当理事・発送担当理事・ホームページ担当理事・機関誌編集担当理事・ワーキングペーパー編集担当理事・研究プロジェクト担当理事・ニューズレター担当理事・大会担当理事を定める。

必要に応じて、任期中に限り、その他の担当理事及び理事を置くことができる。

4 幹事は、各担当理事のもとにおいて、それぞれの職務を補佐する。

第 9 条 本会の機関は次の通りとする。

- 4 名簿担当委員会
- 5 会計担当委員会
- 6 発送担当委員会
- 7 ホームページ担当委員会
- 8 機関誌編集担当委員会
- 9 ワーキングペーパー編集担当委員会
- 10 研究プロジェクト担当委員会
- 11 ニューズレター担当委員会
- 12 大会担当委員会

13 その他の担当委員会

14 拡大理事会

第 11 条 本会には、会長が設置する事務局をおく。

付則 9 2006（平成 18）年 6 月 3 日改正。理事の職務分担の変更、担当委員会の変更、事務局設置の明確化。但し、2006 年度までは旧規定に基づくものとする。

## 第 7 号議案 次年度大会・総会の開催地・開催校について

理事会原案として日本福祉大学（名古屋キャンパス）が示され、賛成多数で承認されました。なお、その翌年度には東京都内もしくは近郊での開催を予定していることが、あわせて報告されました。

## 理事会報告

### 2005 年度第 3 回理事会報告

2006 年 6 月 3 日（土）島根県立大学

#### 審議事項

#### 1. 第 27 回総会議案書について

事務局作成の総会議案書（案）をもとに審議し、同日開催の総会議案書とすることが合意されました。

### 2006 年度第 1 回理事会報告

2006 年 6 月 4 日（日）島根県立大学

#### 審議事項

#### 1. 『日中社会学研究』の編集・査読方針について

編集委員会より、点の問題提起がなされました。

- ・ 論文の射程範囲と投稿資格について、一定のガイドラインを設ける必要はないか

たとえば、日本社会のことだけを扱った論文の場合、議論となりえるということです。審議の結果、内規として一定のガイドラインを設けることが妥当であると合意されました。

・ 査読の判定段階について、「不可」を設けることはできないか  
従来は、論文として掲載可、修正を条件に論文として掲載可、研究ノートとして掲載可、修正を条件に研究ノートとして掲載可、の4段階でした。査読者の負担および査読依頼の負担を考慮し、不可という判定を設けてはどうかという提案です。審議の結果、5段階とすること、査読者が2名とも「不可」とした場合には掲載しないこと、その際にはワーキングペーパー集への投稿を勧めること、が合意されました。

## 2006年度第2回理事会報告

2006年10月28日(土)立命館大学

### 審議事項

#### 1. 理事の退任について

星理事より、体調が思わしくないため、退任の申し出があり、審議の結果、退任を承認しました。また、残り任期が約7ヵ月と短いため、後任置かないことも承認されました。

#### 2. 役員の改選について

規程に沿って、3名の選挙管理委員を委嘱すること、開票において複数人数が立ち会うことが容易な人選とすることが承認されました。

#### 3. 中長期計画の策定について

広く会員からご意見やアイデアを募り、そのとりまとめを行いながら計画案を固めていく、という進め方が承認されました。

## 『日中社会学研究』第15号 原稿募集のお知らせ

(編集委員会)

当学会の機関誌『日中社会学研究』第15号の原稿を下記の通り募集いたします。

投稿を希望される方は、2006年12月8日(金)までに電子メールにてお申し込み下さい。登録受付の旨を返信メールにてご連絡いたします。会員の皆様の投稿をお待ちいたしております。

記

投稿登録締め切り：2006年12月8日  
(原稿提出締め切り：2007年2月2日)

原稿登録の際の必要記入事項：

氏名

連絡先住所、電話番号、FAX、メールアドレス

所属、身分

投稿予定原稿のタイトル

投稿登録先：

南 裕子(一橋大学大学院経済学研究科)

E-mail：[yminami@econ.hit-u.ac.jp](mailto:yminami@econ.hit-u.ac.jp)

\*なお電子メールで投稿申し込みができない方は、FAX(047-322-8802)をご利用ください。

# 日中社会学会研究集会のお知らせ

日中社会学会事務局

日中社会学会研究集会を、つぎの通り三部構成で、2日間にわたり行います。初日は、愛媛大学法文学部の主催、日中社会学会後援、二日目は日中社会学会の主催、愛媛大学法文学部後援となります。会員各位の参加にあたっては、手続きなど何ら相違はありません。

プログラムは当日までに更に充実させます。日中社会学会と中日社会学会の連携の将来を担うであろう方々が一堂に会し、熱く問題を討議する研究集会となります。ぜひ両日ともご参加ください。

## 研究集会プログラム

**12月8日(金)**

**セッション 10:30～12:45**

(会場) 愛媛大学法文学部大会議室, 愛媛大学法文学部本館 8 F

主催者挨拶

講演

講演題目 中国の社会学研究者からみた日本社会

講演者 羅紅光(中国社会科学院社会学研究所 教授)

質疑応答(フロアーとの対話を重視します)

\*12月8日の午後は、愛媛大学での日程があります。ご容赦ください。会員各位には、午後の行動にかかわるご案内を、当日準備いたします。

\*昼食についてのご案内は、当日、会場にて行います。

懇親会 1 18:00～20:00

**12月9日(土)**

**セッション 10:00～12:00**

(会場) 愛媛大学法文学部大会議室, 愛媛大学法文学部本館 8 F

主催者挨拶

講演 (共通テーマ) 中国における底辺層と民衆

講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 1

講演者 戴建中(北京市社会科学院社会学研究所 副所長・教授)

講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 2

講演者 李国慶(中国社会科学院都市発展・環境研究センター 教授)

質疑応答(フロアーとの対話を重視します)

昼食 12:00～13:30(昼食についてのご案内は、当日、会場にて行います)

**セッション 13:30～17:30**

講演 (共通テーマ) 中国における底辺層と民衆

講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 3

講演者 張玉林(南京大学社会学部 副教授)

- 講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 4  
講演者 郁貝紅（福州大学文化社会科学院 副教授）  
休憩 15:10～15:20  
講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 5  
講演者 次仁央宗（西藏大学文学院 副教授・西藏大学蒙藏文化比較研究所 所長）  
講演題目 「移動」からみる中国の社会変動とその将来 6  
講演者 湯青川（青海大学農牧学院農学系 副教授）

質疑応答（フロアーとの対話を重視します）

#### 総括討議

戴建中，羅紅光，李国慶，王韻，郁貝紅，張玉林，次仁央宗，湯青川，  
陳立行，首藤明和，東美晴，唐燕霞，陳捷，永野武，中村則弘ほか

懇親会 2 18:00～19:30

#### 会場までのアクセス

##### 会場のご案内

両日は愛媛大学城北キャンパス（法文学部所在地）の正門に，立て看板と案内文を用意します。また，正門の守衛さんにも連絡を入れておきます。なお，法文学部本館は，正門から直進，図書館前広場と法文学部講義棟を過ぎたところの十字路の左向こうです。茶色系統の8階建ての建物，入り口に法文学部のお守り犬「ハナ」ちゃんのダンボールハウスがあります。

##### 松山空港，松山駅からのアクセス

松山空港，JR 松山駅から，タクシー利用の場合

「愛媛大学城北キャンパス正門（法文学部のところ）」とお伝えください。空港からは混雑時でなければ，約 20 分あればつきます。JR 松山駅からは 10 分～15 分程度です。

松山空港からリムジンバス・市内電車利用の場合，JR 松山駅から市内電車利用の場合

松山空港からリムジンバスで JR 松山駅下車。すぐそばの市内電車（城北線）のりばから，上一万方面（鉄砲町や日赤前方面でも同様）に乗車し，日赤前で下車します。駅から日赤や愛媛大学が見える北の方向に徒歩 1 分で愛媛大学城北キャンパス正門に着きます。所要時間は空港から大学まで 45 分～1 時間程度。JR 松山駅から愛媛大学正門は約 20 分～25 分程度。

#### 関連視察について

12 月 10 日（日）は，愛媛県内の中国と密接な関連をもつ地域や団体などの視察を行います。本会会員の方に限り，同行できるように手配いたします。関心のある方は，気軽に申し出てください。

#### 出張依頼文書

出張依頼文書を会長・事務局の方から取り急ぎお送りします。下の連絡先までご一報ください。

#### お問い合わせ

ニューズレター記載の日中社会学会の関連アドレス，電話・ファックスをお願いします。中村研究室（愛媛大学）のメールアドレス，電話・ファックスでも構いません。中村研究室については，E-mail:[nakamura@LL.ehime-u.ac.jp](mailto:nakamura@LL.ehime-u.ac.jp)，tel&fax:089-927-9366 です。

なお，重要な依頼や問い合わせについては，複数の連絡先をお願いします。

## 調査ノート(1) 「貧困観光考 - 青海省調査から」

東 美晴(流通経済大学)

はじめに

2006年9月2日から6日のほんのわずかな間だが、科研費研究「中国における底辺階級の実践的研究(代表:中村則弘)」の一環として、青海省を訪れる機会を得た。ここでは、観光の社会学・人類学的研究の側面から、中国における底辺層のあり方を捉える視角を模索する。

ところで、山下は1994年の時点で、観光の人類学的研究の意義について以下のように指摘している。

観光は世界資本主義システムの一部として展開されているわけだから、観光の研究は、当該社会だけに視野を閉ざすことができず、それをとりまいているマクロな社会体系 都市、国家、そして世界資本主義システム をつねにその視界に取り込まなくてはならない。その意味で観光の民族誌は、ウルフ・ハナーツが言う地球規模の連関における「マクロ人類学」、あるいはアパドゥライのいう「マクロ・エスノグラフィ」を実践するための野心的な試みとなる。そうしながら、観光の民族誌は、世界資本主義というマクロなシステムと具体的に観光が展開されるホスト社会のミクロなシステムの「コンタクト・ゾーン」、あるいは接合点を研究することになるのである(山下,1996,10)。

実際、観光産業は、産業化されていない地域の伝統文化・伝統的生活・自然環境などを、対価を支払い見る価値がある対象と仕立て上げることで、世界経済システムの末端に組み込む近代産業であるという側面も内包している。中国においてもこれはあてはまる。たとえば、雲南省の景洪は、1997年の時点で観光収入が7.67億元(外国人観光客が落とす収入は6.82億である)GDPの38.5%を占めるに至っている(劉,2001,42)。この数値だけでも、少数民族観光という観光対象の創造・実践が、西双版纳・景洪の社会・経済に与えてきたインパクトの大きさが想像できる。

だが、ここで注目したいのは、観光客を受け入れるホスト側だけでなく、そこを訪れるゲストもまた、観光の経済システムの中へ、望む望まざるに関わらず組み込まれるということである。今回の青海における我々の調査行程そのものを、この観光の経済システムの文脈に置き、読み直してみたい。

そのための、補助的議論として、以下に二つの議論A・Bをあげておく。

### 1. 補助的議論

議論A:疑似(模倣)体験としての観光

ダニエル・ブーアスティンが観光旅行を「疑似イベント」と位置づけたのは既に40年以上前のことである。葛野浩明はグレーバーンの類型の上に、疑似(模倣)体験として、90年代時点での日本の観光の類型化を試みる。ここでは、今回の調査に関連するものとして【援助ツーリズム】と【エスニック・ツーリズム】を葛野の文章そのままに示しておく(葛野,1996,27-128)。

【援助ツーリズム】戦場と並んで貧困や飢餓もまた、私たちにとって最後の非日常である。たとえばフィリピンのスモーキーマウンテンに佇めば、誰でも世界経済の構造的なひずみを痛感し、「貧困の文化」を観光することにとどまてはられなくなる。必ずや援助体験が観光に含まれることになる(すでに欧米では「オルターナティブ・ツーリズム(もう一つの観光)」の1つとして【サポーターティング・ツーリズム】述語が定着しつつある)。文化・社会的側面から人間の真理を追究する活動が《文化観光》だとすれば、【援助ツーリズム】はコンゴ最も進展する可能性を秘めた《文化観光》の1つであろう。貧困や飢餓が最大の非日常でありながら、私たちは黒柳徹子という、国際的に高名であり、しかし大変に親しみやすい模倣の対象を持っている。この妙で皮肉すぎる構造にはいくら注目してもしすぎることはない(葛野,1996,127)。

【エスニック・ツーリズム】グレーバーンのいう「民族観光」とは自然と人間（文化）をつなぐ「大自然の子供たち」、言い換えれば「自然人」を觀賞する観光であった。しかし、民族観光は、その目的が自然への接近から徐々に「異文化」「異民族」へとシフトしていく。すなわち、「(異)民族」「異文化」が「発見されることで、初めて「民族観光」は本当の意味での「民族」観光になるものであり、…。

日本での【エスニック・ツーリズム】の達人は本多勝一であり、本多の『カナダ＝エスキモー』『ニューギニア高地人』『アラビア遊牧民』は聖典とさえいえる。これら「極限の民族3部作」を本多の旅の順に読み進めると、そこに「大自然の子供たち」「自然人」から「民族」の「発見」へという、旅の精神史とパラレルな道筋が感じ取れることは大変に興味深い（あくまでも私個人の読み方であって、本多の旅の意図とは無関係である）。

もちろん、人類学者も（『悲しき熱帯』のレヴィ＝ストロースのように優れた旅人であればだが）模倣の対象となるであろう。人類学者を「プロフェッショナル・ツーリスト」と呼ぶ傾向が明らかに強まっている（揶揄的・自嘲的表現として使われることも多いが）（葛野,1996,128）。

#### 議論B：階級、まなざし、世界経済システム

アーリは観光の嗜好として、「ロマン主義的まなざし」と「集会的まなざし」という概念を提示している。「ロマン主義的まなざし」は簡単には「すばらしい景色に対するエリート主義的（孤独主義的）見方」であり、「かなり文化資本が求められる見方」である。一方の「集会的まなざし」は大衆観光のまなざしである。「ロマン主義的まなざし」は、18世紀末から19世紀初頭におけるロマン主義の影響のもとに、観光が生成される過程において出現したものであるが、上流階級ばかりでなく、現在では中間階層を巻き込み、さらに広がっている。実際、ある種の観光客は、手垢の付いていないもの、本物を求め、より遠くへ出かけ、自分の体験を低俗な大衆観光と区別したがる。しかし、このような「ロマン主義的まなざし」も世界経済システムに組み込まれている。

開発途上国での観光の成長（ケニアでの「動物観光（ゲーム・ツーリズム）」、メキシコでの「民族観光（エスニック・ツーリズム）」、ガンビアでの「スポーツ観光」など）は単に国内の社会変化の過程から生じたとはいえないということをおさえておくことが肝要である。こういう開発の可能性は多く外的条件からの帰結でもあるのだ。それはたとえば次のようなものだ。廉価航空券、コンピュータ予約システムシステムなどの技術的变化。世界規模のホテルグループ（ラマダ）、旅行代理店（トーマス・クック）、個人向けの融資会社（アメリカン・エクスプレス）などの成長を含む資本の発達。ますます大衆観光のパターンから離脱したいと願う意味での「ロマン主義的まなざし」の倒錯の蔓延。先進国の人々が自分より後進の世界の文化習慣に抱くあこがれ。皆がまなざしを向ける場所を上っ面だけ経験する、本質的には場所の「収集家」としてのツーリストの増加。観光が大きな潜在的発展性を持つと判断し、また、促進もしたいという点で関心を持つ財力豊かな大都市の外野席の人の出現である（アーリ,1990,114）。

## 2. 青海省の観光産業

現代中国における観光産業は、改革開放後の外貨獲得策の一環として、外国人に対する開放地区を設定し、観光客誘致開始したことに始まる。西部10地域（陝西、雲南、四川、新疆、西藏、甘肅、重慶、青海、寧夏、貴州）における省政府レベルでの観光産業育成への取り組みは陝西省の1985年が最も早い（劉,2004,38）。これは、中国が世界遺産条約を批准した年であり、1987年における秦始皇帝陵および兵馬俑坑の世界文化遺産指定を睨んでのことであったらう。この間の1986年には、中央政府レベルにおいて観光規則の改正が行われ、7つの重点観光地区に対する政府からの直接投資などの施策が行われ、秦始皇帝陵および兵馬俑坑もその対象となっている（李,2004,344）。中央政府レベルにおいて、観光による外貨獲得政策を強化したことがうかがわれる。

この後、92年には雲南省が、93年には四川省が政府レベルでの観光産業育成を決定していく（劉,2001,38）。また、90年代半ば以降の中国国内旅行者の増加傾向をも背景に（国内旅行人口は、92年まで2億から3億程度であったが、95年に6億、99年に7億を超え、2005年には12億に至っている）、1998年には中央政府が旅行業を「国民経済の新增長点」と位置づけていく。これを受け、多くの省・自治区・直轄市が観光産業の支柱産業としての育成を決定する。西部地域でも貴州省を除く9地域において、1999年までに、観光業育成に関するなんらかの決定がなされている（劉,2001,38）。付け加えると、1999年に提示された西部大開発戦略も、中国西部地域の観光開発に拍車をかけていることは言うまでもない。

そこで、今回の調査地である青海省へ焦点を移そう。青海省政府は1998年に「關於加快旅游資源開發的若干決定」を出している。だが、他の西部各省に比べると、資金援助、資金貸与等を欠く不十分なものである（劉,2001,38）。また、『中国旅游統計年鑑2003』から青海省を訪れた観光客数を見ると、1995年13,300人、99年20,500人、2001年39,700人、2002年43,532人である。確かに観光客数は増加しているが、この数値は隣接する雲南（2002年1,303,550人）、四川（同667,224人）、甘肅（同236,812人）、西藏（同142,279人）と比べ、遙かに少ないものである。これらから、青海省の観光産業は、西部地域の中でも後発であり、未成熟であることは理解できる。

### 3. 青蔵探検旅游と調査日程

#### 青蔵探検旅游

今回の調査は中国青海省登山協会を通して実現したものであった。現在、青海省登山協会は中国青海省国際体育旅行社を兼ねている。青海省登山協会は、外国人登山者の管理と便宜のため1985、6年頃に発足したものであり、民間組織であると同時に、青海省政府による管理組織でもある。旅行社を兼ねるようになったのは1998年であるという。そのため、一般の観光旅行を扱う旅行社ではなく、登山や探検など、特殊な旅行を扱う会社であることを強調する。

#### 調査プログラムの検証

資料1は青海登山協会から提示された我々の調査プログラムである。実際には、9月5日の調査はキャンセルし、市内での資料収集に当たった。また、筆者は6日には北京に戻らねばならなかったため、大通県の調査には参加しなかった。そのため、筆者が実質的に調査に同行したのはほんの2日間に過ぎない。

ところで、資料2は登山協会（国際体育旅行社）のパンフレットに記載されたツアープログラムの一つである。このパンフレット『青蔵探検旅游』には、登山探検、山間徒歩、江源探検、江河漂流、汽車旅游、自転車摩托車、宗教文化、観光旅游、節慶旅游、生態旅游、騎馬旅游の11項目に分類された、45本のツアープログラムが掲載されている。「青海風情之旅」は「観光旅游」の項目に分類されるコード番号QMA31のツアーである。

我々の9月3日、4日の予定と、「青海風情之旅」中の第4日、第8日の行程はほぼ同じである。我々の調査は、貧困地区にある家庭を訪ね、その状況についてインタビューすることがその内容であったが、「青海風情之旅」中の第4日の旅程には「藏族家訪」が組み込まれており、我々の調査とほとんど変わるところがない。異なる点があるとすれば、我々は2軒を訪問したことぐらいであろう。我々は調査者として、あれこれと立ち入った質問をしたつもりであっても、好奇心旺盛な観光客も藏族の生活文化や経済状況について、一定程度の質問はするのであろう。また我々は9月4日には、互助県にて土族の家庭二軒を訪問した。その一軒は、土俗風情の農家楽（農家料理を提供する休憩、宿泊観光施設）を営む家庭であった。その家庭におけるインタビューにて、土族の伝統的祭礼として「花児会」の話題が出たが、その「花児会」さえ、資料3に示すように、すでに観光メニューに載せられていた。また、キャンセルになった9月5日の循化県清水郷は天池（正式名称は孟達天池、國家級自然保護区である孟達自然保護区内にある）の入り口にあり、ここを訪れるツア



ープログラムとして QMA41 貴徳黄河灘・孟達生態旅游がパンフレットには掲載されていた。

資料1 青海登山協会による今回調査の旅程

- 9月2日 北京 - 西寧  
 昼食後塔爾寺参観。
- 9月3日 調査対象：青海湖甲乙村（藏族：共和県青海湖青海湖畔を居住地とする）  
 観光メニュー：日月山、青海湖。
- 9月4日 調査対象：互助（土族，中国のみに存在する少数民族の自治県）  
 観光メニュー：土族民俗村
- 9月5日 調査対象：循化県清水郷（薩拉族：中国のみに存在する少数民族の自治県）  
 観光メニュー：拉木峡，天池
- 9月6日 調査対象：大通県（漢族）  
 観光メニュー：夜、汽車にて西寧から拉薩へ

資料2 パンフレット掲載の観光プログラム1

青海風情之旅

青海省は青蔵高原に立ち、平均標高が3千以上になる。省名は省内に抱える中国最大の湖である青海湖に由来する。観光資源は極めて豊富である。風光明媚の青海湖、鳥島、チベット仏教の各寺院 - 塔爾寺、チベット族、土族、モンゴル族、サラ族、回族の多彩な民族風習等がより多くの観光客を魅了している。

日数	起止地	距離	交通	活動内容	食宿泊地
1	- 北京		飛機	入境	新北違飯店
2	北京 - 西寧		飛機	博物館	青海賓館
3	西寧 - 塔爾寺 - 西寧	100	バス	塔爾寺 北禪寺	青海賓館
4	西寧 - 青海湖	160	バス	日月山 藏族家訪	信越山莊
5	青海湖 - 鳥島 - 青海湖	310	バス	鳥島	信越山莊
6	青海湖 - 海晏 - 西寧	240	バス	金銀灘 清真大寺	青海賓館
7	西寧 - 李家峡	160	バス	坎布拉（森林公園）	李家峡賓館
8	李家峡 - 互助 - 西寧	230	バス	土俗村	青海賓館
9	西寧 - 北京		飛機	市内観光	新北緯飯店
10	北京 -		飛機	出境	回国

資料3 パンフレット掲載の観光プログラム2

六月六日花児会

“花児”または“少年”は、わが国西北地区に広く伝えられる民謡である。花児会では、恋人たちが「対歌」の形式で互いに情を表現し、相手に対しその才を披露する。“花児”の内容は多彩であり、曲調は質朴で郷土色に満ちている。青海は“花児の海”と呼ばれ、毎年陰暦4月から6月に、各地で花児会が次々に開催される。そのときには、丘の上、田の中、小川のほとり、至る所が“花児”の舞台となる。

日数	起止地	距離	交通	活動内容	食宿泊地
1	- 北京		飛機	入境	新北違飯店
2	北京 - 西寧		飛機	市内観光	青海賓館
3/4	西寧 - 大通	50	バス	花児会	大通賓館
5	大通 - 西寧	80	バス	北禪寺，清真寺	青海賓館
6	西寧 - 塔爾寺 - 青海湖	180	バス	塔爾寺，青海湖	信越山莊

7	青海湖 - 西寧	240	バス	金銀灘草原	青海賓館
8	西寧 - 北京		飛機	市内観光	新北緯飯店
9	北京 -		飛機	出境	回国

### 3. 青海の貧困観光

#### 貧困の商品化

先に、援助ツーリズムにおいて「貧困の文化」が観光対象となり得るといふ、葛野の指摘をあげた。今回の我々の体験は、旅行社が介在しツアーのプログラムが設定されるとき、「貧困」さえ観光商品として陳列されることである。もちろん、ツアープログラムが売ろうとしているのは青海風情であり、直接的に貧困を商品化しようとしているわけではない。だが、貧困地区を見たいと望む奇妙な研究者たちに対して提示されたものも、ツアープログラムそのままの少数民族の暮らしであった。

青海において少数民族の暮らしが、そのまま青海風情を満喫できる観光商品となるのは、その生活が十分産業化されないままに保持されているためである。通常、行われる加工作業、すなわち観光地としての整備や文化を見せるための工夫は、藏族地区においては全く施されていない。土族地区においても、個人・民間単位の投資による小規模な農家楽、観光村が設置されているだけであり、ごく初歩的な開発であることが見て取れた。

全く開発がなされていない藏族地区の生の生活が、なぜ観光商品となり得るのかを考えるならば、観光客が「自然とともに生きる生活」に感動したり、「近代とは異なる言説や文化表象」に感心したり、「豊かではないが素朴な暖かさ」を感じ、満足すればよいのである。この意味で、少数民族観光そのものが、もともと観光客のオリエンタリズム的な「ロマン主義的まなざし」に支えられるものである。

#### 貧困の商品価値

より近代化の度合いが低いこと、産業化の度合いが低いことは、時として、少数民族観光にとっては、それがより本物であることを示す指標として利用される。それは秘境性の高さであり、希少価値へとつながる。

青海登山協会は、自らの旅行社の扱う旅行が、通常の観光旅行ではなく冒険、探検色の強い、特殊なものであることを強調するが、この特殊性の強調がすなわち本物性の強調である。旅行社側にとっては、特殊性、本物性の強調は、一般的観光、すなわち大衆観光との差別化を図り、自社のツアーの価値を高め、単価を上げることになる。この意味で青海登山協会のような特殊な観光商品を扱う旅行社にとっては、観光開発の遅れはマイナスにはならず、むしろプラスにさえなり得る側面がある。

なお、劉は青海省の現状における優勢産業として特色農牧業と特色旅游業をあげており、ここから青海登山協会が提供するプログラムが青海の観光において特別なものに分類されるわけではないことが理解できる（劉,2001,25）。

こうしてみると、青海省において登山や探検とフィックスでまなざしをむけられる少数民族は、観光客に観光化されない生活を開示せねばならず、近代的意味においてより貧困である方がリアルであり、観光商品としての価値が高まるという皮肉な側面を持つのである。

#### 参考文献

葛野浩昭,1996「観光旅行の諸類型 - 疑似体験としての観光旅行」『観光人類学』山下晋司編,新曜社

山下晋司,1996『観光人類学』進暉社

李明徳他,2004「中国旅游規画的發展与創新」『中国旅游發展: 分析与予測 2002~2004』張広瑞他編,社会科学文献出版社

劉鋒,2001,『西部旅游發展戰略研究』中国旅游出版社

Urry Jhon,1990, *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Society*

(アーリ・ジョン,1995,『観光のまなざし』加太宏邦訳,法政大学出版局)

## 調査ノート(2)

中村 則弘(愛媛大学)

### 「チベット族の信仰と精神的苦悩をめぐって」

この夏、科学研究費補助金の予備調査の一環としてラサ市と日喀則市を訪れ、チベット族の村に入った。ラサ市や日喀則市では、四川省から流入した漢民族の姿が目についた。ラサ市の人口では、もはやチベット族を凌駕しているという。同僚研究者の笑い話が忘れられない。「ラサ市は、四川省ラサ鎮だ」。辛辣な言い方だが、的確な印象である。

ラサ市から日喀則市に向かう途中、日喀則市から 30km ほどの場所にある国道沿いの村を訪れ、村長と面談することができた。聞き取り結果からみて、共産党員で 55 歳の村長は兄と同居同然の生活をおくっている。その妻は、兄の妻でもあったとみられた。一妻多夫制が、社会主義政権下においても長きにわたって行われていたことになる。

客間に通され、まず目に付いたのは、毛沢東の肖像写真である。中柱にうやうやしく掲げられていた。また、日々の礼拝の対象になっているのか、その前には、供物や香炉が置くための机がおかれていた。聞き取りのなかで村長は、今の生活は、社会主義政権と改革開放政策のおかげと力を込めて語っていた。

その奥に目をやると、チベット式の仏壇があり、ガラス扉のなかに仏像が数体、凜として安置されていた。村長本人も妻も熱心なラマ教の信者である。年 4 回のラマ教の法事には欠かさず、4 人の僧侶にお経をあげに来てもらっている。お布施は、一人、1 回、20 元だそうである。

さて、それから訪れたのが、日喀則市であった。街はいかにも中国辺境の地方都市然としている。歴史の面影を残す市街地が、寺院の門前のみに限られていたことは、チベットでの歴史的な都市形成のあり方を端的に示しているように思われた。

パンチェンラマの居宅であり、格魯派ラマ教の拠点の一つでもある扎什倫布寺を参観した。文化大革命時代に破壊を被ったが、政府の手による修復、改築もすすみ、いまは壮麗な伽藍を再び見せている。しかし、破壊の物言わぬ名残は、深く刻まれていた。最も痛ましい例は、霊塔に安置されていた五世から九世のパンチェンラマのミイラの顛末である。説明によると、紅衛兵は銃をつきつけながら、チベット人に各霊塔を破壊させ、納められていたこれらミイラを引きずり出させた。そして、その手足まで切って晒したのであった。辛くも難をのがれたのは、ラマ僧が霊廟の入り口を穀物の袋で隠し通した四世の霊塔だけだったという。

先代のパンチェンラマ十世が、霊塔の修復にあわせ、市中に散逸していたミイラの断片を集め復元を試みた。しかし、切断面から乾燥をはじめたミイラは、もはや誰のものか分からない状態になっていたという。それでやむなく、修復した第九世の霊塔に断片をあわせて安置することにしていた。

これらの霊塔では、ラマ教を熱心に信仰する多くのチベット族の人々を目にした。なかでも、四世の霊塔で偶然目にした光景は忘れられない。夫と共に巡礼にきた 40 歳代と思えるチベット族の夫人が、霊塔の前で感涙にむせび、それを回る間に没我の境地で号泣し始めたことである。霊塔を目の当たりにしただけで、法悦にひたっているのである。

かつてチベットにおいても、「階級闘争」が繰り広げられ、ラマ教の影響をかなり払拭したように伝えられてきた。ただし、その実態は、先に触れたとおりであった。改革開放政策の進展のなかで、確かにラマ教寺院の修復は進んでいる。しかし一方で、四川省から漢民族が大量に流入し、ともすればチベット族との間での摩擦を生む事になっている。また、断片的な聞き取りからも理解できるのだが、かつて受けた屈辱を、精神世界の否定を、人々は決して忘れてはいない。

こうみえてくると、チベット族の人々の精神的苦悩が、ささやかながら理解できたような気がしている。その一端は、前に触れた村長のあり方に垣間見られている。村長は、諸仏と毛沢東をともに信心の対象としている。そこには、共存、習合する世界が展開しているようにも見受けられる。し

かし、その両者は決定的に対立し、排他的な関係にしかなり得ていないのである。宗教施設の破壊を命じた人物と、破壊対象とされた諸仏であること考えれば、当然のことでもあろう。毛沢東の肖像写真が、仏壇のなかに同じように置かれていないこと、またそれが仏壇の前に、あえて、うやうやしく掲げられていることは、習合され得ない断絶があることの証左といえるのではないだろうか。このことがらは、彼らの引き裂かれた精神世界をめぐる苦しみを象徴的に物語っているように思えてならなかった。

## 「公衆便所の子供達」

ラサ市から日喀則市に向かう国道沿いに、うすら汚い公衆便所があった。有料便所のようなものではまったく無い。

その入り口で、小学生とおぼしきチベット族の子供達が、「一塊銭！一塊銭！」と利用者の前に立ちはだかっていた。有料便所としても、法外な利用料である。無視して入った者には、車にまで集金にくる。

たぶん、その村公認の闇副業なのだろう。施餓鬼ではないが、施しという行為がもつ意義は十分に理解できる。しかし、子供達の臆面のない姿が、余りに悲しかった。引き裂かれ、すさんだ精神世界の表れを見せつけられた思いが拭えなかった。

~ ~ ~ ~

## 「中国定点観察記」第1回

### 「日語老師」

池本 淳一  
大阪大学博士生  
兼大連外国語学院外国人教師

大家好！池本です。私は今、中国社会科学院での訪問学者を終え、大連外国語学院という大学で日本語教師（正式名称は「招聘専任教師」又は「外国人教師」だったような）をはじめました。現在、周五日、合計八コマの授業を担当しつつ、空き時間に論文執筆に勤しむ毎日をおくっております。とにかく無事？留学生活が終了し、ここ大連で新たな生活をスタートさせた次第です。というわけで、このコラムも「留学雑感」から「中国定点観察記」と題名を改め、これまでどおりポソポソと続けていくこととなりました。今後ともよしなしに。

さて第一回目のお題は「日語老師」です。日語老師とは、大学や培訓（技術専門学校）などで日本語を教える日本人教師のことです。昨年は多くの都市を放浪しましたが、現在、大都市での日本語学習熱というものはかなりのものだと感じました。たとえば上海では「山木培訓」という語学学校が有名で、ひげづらのおっさんが頼杖をついた看板（おそらくこの人が山木さんのだろう）がそこら中にあり、例えば上海で出会った日本語学習者（特に大学生以外の人たち）は、ほとんどがここで日本語を習っていた方たちでした。

このように、今、中国では日本語教育は立派なビジネスとなっています。そう聞くと、日本語がこれだけでもはやされているのなら、さぞかし英語熱も高いのだろう、と思うかもしれませんが。確かに英語を習いたい、習っている人も多いものの、しかし産業としては日本語の方が断然盛んです。なぜなら、たとえば大学生や技術職（今ならIT関係ですね）の場合、英語が出来ればより条件の良い就職先が見つかる、つまりキャリアアップに繋げることができます。しかしながら、高中卒や

手に職のない若者にとっては、英語だけ出来てもそれだけでは就職できない現状があります（そういう仕事は英語学科の大学生が独占しています）。しかし日本語の場合、日本語のレベルが一つ上がるごとに、確実によい条件の職種や職場に転職できる、という状況があります。簡単に言えば、今の中国では英語はキャリアアップのための外国語、日本語はキャリアそのものとなる外国語、という位置付けだと思います（詳細は近日中に発表予定の、若者へのインタビュー調査に基づいた筆者の論文を参考のこと...といっても、いつ書きあがるのやら...）

そういった背景がありますので、街の専門学校では日本語はドル箱講座となっており、また日本人による授業は大変人気がありますので、学校側もより多くの日本人を語学教師として雇いたいと考えています。また現在、日本では「日本語教師検定」（正確な名前は知らないんですが）というのがあるそうで、海外で日本語を教えたい日本人も増えているようです。なら中国の日本語学校には日本人教師がたくさんいるのか、と思いがちですが、じっさいには日本語教師のなり手は少ないのが現状です。

その理由は、給料が安い、という点につきるでしょう。もちろん、一般の中国人と比較すれば高給取りですが（ちなみに私で月三万ぐらいです）、年に一、二回の帰国や、時々無性に食べたくなる日本食、またはこのノートパソコンやら電化製品やら、他の日本人との交際費やら、外国人として中国に住む限り、どうやっても普通の中国人以上に出費がかかってしまいます。また特に都市部の場合、節約生活イコールさまざまナリスク（特に食中毒、強盗・盗難のリスクが深刻です）を負うこととなるため、生活費はウカツにケチるわけにはいきません。さらに将来や不測の事態に備えて、貯金もしなければなりません。実感としては、普通に日本と同じ生活（といっても、食べても腹痛にならないものだけを食べ、洗ってもすぐにしわくちゃにならない服を着て、といったレベルですが）をしていると、給料がそのまま生活費で全部消えてしまうといった感じです。

そういうわけで、日本語教師を本業として生活するのは、実質的に難しいといわざるを得ない現状があります。ではどういう人が日本語教師をするのか、というと、だいたいは定年退職した男性です。まれに40代50代の男性や女性の方もおられますが、たいていは一、二年で帰国するか、中国で他の職に転職する方が多いようです。というわけで、30代（ついに私も三十歳になりました...）の日本語教師というのはかなり珍しいと思います。

こういうわけで、日本語教師のマジョリティはある程度資産があり、生活費の心配が不要な60歳前後の男性となります。しかしこの人たちがまたものすごく元気でびっくりします。まだ体は元気だし、社会的に有益な活動をしているという自負が、精神的な活力をあたえているのでしょう。そういえば、この前もみなさん連休中に雲南省に行く計画を立てていました。結局人数がそろわずいかなかったようですが、実現していれば、十五人ほどの六十歳の男性が雲南の山をピクニック気分で見物する、というツアーになったそうです。

というわけで、池本はこれから少なくとも一年間は、60代の同僚たちに囲まれながら、日々教育と研究に明け暮れる毎日をおくることとなりました。それでは、今後ともよろしく願いいたします。

## 日中社会学会のおゆみ（２） 「趙範先生のこと」

根橋正一（流通経済大学）

現在の日中社会学会における、会員や関係者たちの研究には眼を見張るものがある。多数の研究者が輩出し、世に出る業績の数も多く、質の高いものもある。社会学における中国研究がひとつの確かな流れになっている感がある。1980年に本学会が設立されて数年間は、何人もの社会学の大家がメンバーに名を連ねておられたとはいえ、中国研究を看板に掲げる方はなく、院生レベルの若者たちが取り組み始めているばかりで、研究はまだ細々としていて、頼りない小さな流れであった。学会の活動として、時々中国からやってくる社会学研究者を呼んで、当時の中国社会の状況や課題について聞き、素朴な質問をぶつけるといった会や、中国を訪れる機会をもった会員の報告を聞く会を開いていた。学会主催で行われた研究会は81年に1回、82年には開催されず、83年には2回開催された。すなわち、次の会である。

1981年10月12日：趙範先生を囲む会（東京神田・学士会館）

1983年3月22日：陳嘉年（香港中文大学社会学部教授）講演会「現代中国の労働者参加」（中央大学）

1983年5月26日：中国人留学生沙蓮香さん・劉又星さんを囲む会（東京神田・学士会館）

83年の陳嘉年先生の講演会は、先生が中央大学を訪問されたのを機に、当時本学会事務局長であった石川晃弘先生が設定された会であった。

われわれがはじめて中国から社会学関係者を招いて会を持ったのは81年10月で、中国社会科学院社会学研究所顧問の趙範先生を囲む会であった。趙先生は、アジア社会学者会議および日本社会学大会（慶応義塾大学）に出席するために来日したものであった。第3回アジア社会学者会議は「アジアにおける社会発展の比較」をテーマとして、10月11日日本社会学会の特別部会として公開されたほか、12・13日の普通セッションは専門家会議として六本木の国際文化会館でおこなわれ、韓国やタイ・インドネシア・フィリピンから社会学者が参加したほか、中国からはじめての社会学者として趙先生が招聘されていた。大学学生であった私はその事務局スタッフの一員として鶴見和子先生の下で中国からの客人の接待にあたった。趙先生とともに社会学会や会議に参加したほか、東京見物したりみやげ物を買うのに付き合ったりした。そんななか12日の夕方には日中社会学会の交流会がもたれた。10人ほどの会員が夕食をとりながら、復興の過程にあった中国の社会学の様子などについて話題にした。

趙先生は中国社会学会や社会学研究所の立ち上げに寄与されたものの、その後は高齢や体調のためにあまり表舞台に出られなくなり、日中間の学术交流が進むなかでもお目にかかることは少なくなった。1985年ごろ、私は勤務していた短大の要請で、中国の幼児教育に関する資料収集や研究を手がけることになり先生に相談したことがある。私は北京訪問の際趙先生にインタビューし、資料をもらう約束したが、その日別の席で強い白いお酒をしこたまいただいて一切の記憶を喪失し、約束を反故にしたまま朝までぐっすり、という失態を演じた。翌日起きると50冊以上の児童書が私のベッドの脇に置かれていた。私の研究のためにと先生が買い集めてくれたものであった。

次に趙先生にお会いしたのは1994年の春であった。そのことは当時創刊したばかりで、私が福永安祥先生とともに編集を担当していた『日中社会学研究』第2号の編集後記に記したので紹介しておく。

ゴールデンウィークに上海と北京を訪問した。北京で趙範先生の住居を訪れた。1981年以来の付き合いであるが、先生は引退後あまり公的な場所に出なくなったため久しぶりの再会であった。先生はもう89歳ながらお元気で、広く清潔なアパートで読書や気功を楽しみながらゆったりと暮らしておられた。短時間であったが楽しい会話であった。日中の社会学界の交流の先駆者でもあるわけである。「渇水忘不了掘井の人」。

あれからまた長い時間が過ぎてしまった。

## アジア農村社会学会会議 (ARSA) 案内

高橋 明善

6月の濱田での大会時にご案内しましたが、2007年に中国北京で第3回アジア農村社会学会議開催されます。日程など、当初の予定と変わりました。最終的には詳細が決定していませんが、現在までに判明していることをお伝えします。出来るだけ多くの会員が関心を持ち、大会の開催にご協力頂くとともに、参加して頂くようお願いいたします。

### (一) 会議の概要

1. メインテーマ **Globalization, Competitiveness and Human Insecurity in Rural Asia**
2. 期日：2007年8月8日(水)～10(金)
3. 開催地・場所：北京・中国社会科学院(CASS)
4. 開催機関：中国社会科学院社会学研究所および都市発展・環境研究センター  
アジア農村社会学会(ARSA)
5. プログラム・チェア：李国慶 教授
6. 発表申し込み締め切り日：2007年3月31日
7. 発表要旨締め切り：2007年5月10日
8. ホテル、参加費と参加および発表の申し込み手続き等  
中国側が11月に開設するホームページ(ARSA2007China)を参照。なお、共催機関の一つ、中国社会科学院都市発展・環境研究センターのホームページは<http://city.cass.cn/>
9. 分科会  
出稼ぎ労働者の都市適応、農地徴用と収益分配、農村における階層分化、農村地域における環境保護、メコン川開発、高度経済成長と新農村建設、農民の社会福祉問題、アジア農村文化の共通性と多様性、21世紀におけるアジア農村の基礎概念などの分科会を設定します。
10. 寄付金払い込み口座の開設  
日本の関係者からの寄付をお願いするために、中国社会科学院都市発展・環境研究センターが中国商工銀行北京支店 (INDUSTRIAL AND COMMERCIAL BANK OF CHINA BEIJINGZHAN SUB-BRANCH)に下記の銀行口座を開設したので、多くの方からの寄付をお願いします。また、知人や関係者の方々へ寄付の呼びかけをお願いします。

・ A/C holder ' s name

ZHONGGUOSHEHUIKEXUEYUAN

CHENGSHIFAZHANYUHUANJINGYANJIUZHONGXIN

(上記の口座名は、中国語の「中国社会科学院」「城市发展与環境研究中心」のアルファベット表記)

・ A/C No.0200064719014427207

SWIFT Code: ICBC CN BJ XXX

振込先がややこしいのですが、銀行では判ると思いますので、銀行に持参して指示に従ってください。

### (二) 参加希望者

高橋明善まで、ご連絡下さい。日本村落研究学会の参加者とあわせて、集団でツアーを組むことも考えられます。参加者には別途連絡の便宜を図ることが出来るかと思えます。また、参加費で、

中国から求められている資金協力を、日本がどの程度できるか把握することも出来ます。

高橋連絡先

(住所) 193 - 0833 八王子市めじろ台1 - 21 - 14

(電話、Fax) 042 - 663 - 4641

(mail) [taka-aki@msg.biglobe.ne.jp](mailto:taka-aki@msg.biglobe.ne.jp)

(三) 寄付金へのご協力お願い

国際会議の開催のために何よりも必要なのは資金です。中国側からは参加費を含んで、150～200万円の日本からの資金協力が出来ないかと相談されています。上記の口座にお振り込み頂くのが最も手取り早いです。11月に開設される、アジア農村社会学会議のホームページをご覧ください。青井和夫、細谷昂、柿崎京一氏ら、と高橋などリタイアしたひとが協力呼びかけしようかと相談しています。参加費が2万円程度と思われるので、ご協力の気持ちのある非参加の方もそれをひとつの目安にして頂くこともできるかと思えます。参加の方も可能なら、参加費のほかに幾ばくかのご協力をお願い出来れば有り難いと思えます。強制ではありあせんので、5千円でも、一万円でもご協力願えればと思っています。

## 中日社会学会と日中社会学会の 今後の交流について

首藤明和（庶務理事・プロジェクト担当）

2006年8月29日、中国社会科学院社会学研究所（北京）において、中日社会学会と日中社会学会の今後の交流について意見交換を行いました。

会議の出席者は、中国側からは、陸学芸氏（中国社会科学院社会学研究所・元所長）、景天魁氏（同・前所長）、李漢林氏（同・副所長）、羅紅光氏（同・『社会学研究』編集部主任）、戴建中氏（北京中国社会科学院社会学研究所・副所長）、王頡氏（中国社会科学院社会学研究所）、陳嬰嬰氏（同）、超克斌氏（同・科研処副処長）が、日中社会学会からは、中村則弘会長、塩原勉会員、陳捷会員、首藤が参加しました。

まず景天魁氏が歓迎の辞を述べられ、また、陸学芸氏と塩原会員の「老一輩」が果たされた日中の社会学交流における多大な貢献について謝辞が述べられました。さらに、日中の

研究者が経済や政治を越えた役割を果たすことが、アジアや世界に対する大きな責任であることを強調されました。その上で、昨今における日中双方の研究者にみるアジア離れについて、危機感をもって言及されました。

続いて、中村則弘会長より、答礼の辞が述べられました。両国間における互惠の関係が、中日両社会学者の交流を通じてさらに深まることが望まれる旨のお話がありました。

この後、陸学芸氏より、中日社会学者の交流の歴史についてお話がありました。陸氏の初来日は1987年であり、甲南女子大学の宮城宏会員（元・日中社会学会会長）、塩原勉会員、橋本満会員からいただいた招聘であったこと、1979年の中国における社会学の「回復」の後、日本では日中社会学会が設立され、1989年までに3回の訪中団が結成されたこと、特に3回目の訪中（1989年初春）では、故・福武直先生（初代・日中社会学会会長）とともに上海や蘇州を回覧されたこと、福武先生がお亡くなりになった後は、先生の蔵書が中国社会



科学院に寄贈され「福武文庫」として今に至ることなど、深い感慨を込められつつ、さまざまな思い出が披瀝されました。

また、中日社会学会の設立にいたる経緯について、陸学芸氏より紹介がありました。中日社会学会の設立準備は、福武先生の遺志を継ぐかたちで、すでに1996年から国務院民政部とのあいだで交渉を始めていたこと、2005年になってようやく民政部から設立許可を得たこと、2006年現在では、民政部の正式な批准を得るために、中日社会学会の財政および委員会組織の細部の確定に取り掛かっていること、しかし、他大学や他研究機関の協力を取り付けて幅広い人材からなる学会を設立するにはまだ時間を要することなどが報告されました。とにかく民政部の許可は得ているので、組織と財政さえ整えば、すぐにでも正式な批准を得て、設立大会を開催するお考えであることも明らかにされました。

陸学芸氏のお話を受けて、塩原会員より、これまでに陸氏が果たされた中日の学術研究交流や研究者育成に対する謝辞が述べられました。また、中日社会学会が民政部の許可を得て、現在、正式設立の準備段階であることに対して祝辞が述べられました。さらに、今後の中日・日中社会学会の交流のあり方として、以下のようなお話がありました。今後の両学会の相互の発展には、中堅世代の努力に負うところが大きいであろうこと、若手研究者を含めた中日双方の研究者が、さまざまな研究交流を持てるような学会にしていく必要があること、日本では、社会学会の国際化が喫緊の課題として取り上げられている、例えば関西社会学会では2007年のシンポに「東アジア」をとりあげ、また日本社会学会では2014年のISA世界大会誘致に向けた取り組みを始めている。しかしながら、世界大会を開催することが必ずしも社会学会の国際

化を意味するわけではない。むしろ中日社会学会と日中社会学会の共同が、社会学会の真の国際化のあり方を示す先導的モデルになる可能性を秘めており、またそうなることを強く望んでいる、そのためには、中日社会学会、日中社会学会ともに、個人をベースとしたネットワークのなかで、研究促進のための調整者としての役割を担う必要があることなどが述べられました。

最後に、中日社会学会、日中社会学会の具体的な交流のあり方について中村会長より提案がなされ、了承されました。すなわち、中日社会学会が正式設立された際には、日中社会学会とのあいだで「交流協定」を結ぶこと、正式設立までのあいだ、陸学芸氏と中村会長、超克斌氏と首藤のあいだで定期的に連絡を取り合うこと、研究大会、研究集会、研究会などを相互に主催し開催すること、研究および研究者のデータベースを作成すること、共同で出版事業に取り組み、その成果を中日の双方の出版社から公刊すること、研究活動を促進するためにも、日中の研究者ネットワークの整備を具体的に進めることなどです。

今後も日中社会学会では、中国との研究交流を促進するために、さまざまな事業に意欲的に取り組んでまいります。中日社会学会の正式設立を前にして、今から、実質的な交流をさらに深めて行く必要があります。新しい情報などがありましたら、随時、ニューズレターでもお伝えします。会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

## 事務局からのお知らせ 会費納入のお願い

理事会報告にもありますように、役員の改選時期がまいりました。会費の未納がありますと、投票権が確保できません。より多くの会員から支持を受けた役員を選出し、本学会をますます発展させるためにも、会費の納入をよろしくお願いいたします。

---

日中社会学会ニューズレター No.48

発行：日中社会学会事務局

〒790-8578

松山大学人文学部永野武研究室

[nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp](mailto:nagano@cc.matsuyama-u.ac.jp)

tel:089-926-7451 (研究室直通)

fax:089-922-5415 (大学事務室)

事務局・業務担当：吉岡智子

[nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp](mailto:nicchu-jimukyoku@tau.e-catv.ne.jp)

tel・fax:089-927-9366

編集担当

首藤明和([shuto@hyogo-u.ac.jp](mailto:shuto@hyogo-u.ac.jp))

発行日：2006年11月